

論理的思考力の育成の観点に立った哲学の授業の実践

A practice in the class of philosophy by introducing a method of repeating causal relation

大谷 孝行
OTANI Takayuki

はじめに

昨今、日本の大学教育のあり方が問われている。先の文部科学大臣の指摘を俟つまでもなく、日本の大学教育の質の向上は喫緊の問題であり、それと関連して、「社会人基礎力」の育成、「学士力」の保証という言葉もよく聞かれるようになった。

社会で働くにあたって必要な基礎力を大学生の頃に涵養しておくべきであることは言を俟たない。それは大学が単なる就職予備校になってしまうことを意味するものではないにしても、大学の使命が社会で活躍し自立できる人材を世に輩出することにあるという意味で、社会や企業の要望に大学が耳を傾けることは避けて通れない。

筆者は大学で教養科目の哲学を担当しているが、哲学の授業を具体的にどのように運営したらよいのか、毎回の授業が試行錯誤の連続である。これまでの経験に照らして言えば、教員の高度に専門化された狭い領域に限って授業をおこなうことは、教養科目という位置づけからして、受講生の興味関心をひくという点でも、また学生に自ら主体的に考える習慣をつけてもらうという点でも大きな困難をとまなう。それでなくても、哲学という学問は学生からすると、何をしている学問なのかをイメージしにくいところがある。

哲学という学問のもつ特徴を、社会人基礎力や論理的思考力という点から見た場合、学生の資質を育てるうえでいかに活かすことができるのか、筆者が勤める大学の授業での実践例を紹介するとともに、哲学という学問がもつ特徴の一端をも示すのが本稿の目的である。

深く考えるということが哲学の大きな特徴であるので、筆者は今年度の授業で試行的に、受講学生を対象に、「なぜ？」を5回繰り返す」ことを課してみた。その結果についても報告したい。

1. 社会人基礎力と論理的思考力

「社会人基礎力」という言葉は、2005年に経済産業省で組織した委員会「社会人基礎力に関する研究会」において、「職場や地域社会の中で多様な人々とともに仕事をしていくために必要な基礎的な力」と定義され、具体的にはAction（行動に踏み込む力）、Thinking（考え抜く力）、Teamwork（チームで働く力）の3つの能力から構成されるとした。

「社会人基礎力」が重視されてきた時代的な背景は以下のようなものである。日本は第2次大戦後に、廃墟から立ちあがった先代たちのたゆまぬ努力により、欧米に匹敵するような競争力のある国家となった。しかし、20世紀後半からは社会・経済環境が激変し、また政治・経済の分野でもアジア諸国を中心として勢力分野が塗り替えられる情勢にある。

労働環境も大きく変化し、個人の価値観が多様化することによって、企業が求める組織目標と個人の価値観との一体化が困難になってきた。このような状況において、個人のキャリアデザインという観点からの人材育成が重視されるようになり、その前提となるのが「社会人基礎力」だと考えられ、それを構成する能力要素の育成が脚光を浴びている。(1)

学生が大学で学ぶ最大の目的は、いつの時代にあっても、将来の自立に向けて知的にも人間的にも成長することである以上、社会で生き、働くにあたって必要な基礎的指標の一つとなる「社会人基礎力」を伸ばすために大学でどのような教育を施せるかは、大学に籍を置くものとして決して看過でき

る問題ではない。

「社会人基礎力」や「学士力」という言葉が登場し注目されている背景には、社会で十分に自分の能力を発揮するための基礎固めをする場である大学において、学生の能力を伸ばし切れていないと感じる現場や社会での強い危機感がある。

そうした中で学生の論理的思考力を伸ばすことも大学教育の使命とされる。文部科学省の中央教育審議会での議論「学士過程教育の構築に向けて」では、学士課程で培うべき汎用的技能（知的活動でも職業生活や社会生活でも必要な技能）の一つとして、論理的思考力や問題解決力が挙げられている。

(2)

高校を卒業する生徒のうち半数が四年制大学へ進学するという大学のユニバーサル化の時代にあつて、学生の基礎的な学力の低下は多くの大学が直面する現実となっている。情報が氾濫し、インターネットを介して即座に多量の情報が簡単に入手できてしまう時代状況、新しい刺激を求めて次から次へと表面をかすめていくように注意が向けられる状況。こうした時代状況にあつて、自分の頭で課題をじっくり考えることは避けられがちになる。

若者を取り巻く環境の変化は大きく、現在の大学生の多くは、バブル経済が崩れ、パソコンが広まりだし、ゲーム機ではプレイステーションが登場し、インターネット、携帯電話が相次いで広まった時代である。携帯電話にメール、サイト閲覧、ゲーム、カメラ、音楽配信機能が加わっていく時代を生きてきた。

また、現在の学校教育の授業科目では、考えることよりも知識の伝授に偏る傾向がある。もちろん考えるためには、基礎的な語彙や用語を習得しておかなければならず、その意味で知識の伝授それ自体に問題があるわけではない。語彙や文法の習得といった基礎がなければ、自由に考えてみよと言われても無理な話である。

しかしながら高校時までの記憶中心の勉強方法にとまなうかたちで、勉強方法のマニュアル化が進む。今の大学生は、与えられた問題を解くのは得意だが、解法の見当がつかないような難問に挑戦したり、自分から課題を見つけたり作り出したりするのが得意ではない。(3)

考えることそのものである言語を操る能力という点においても、若者の言語力の低下が指摘されている。携帯電話の普及と家族間での会話の減少などによって、自分の考えを論理的に表現する力が低下しているという指摘がある。携帯電話のメールが普及したことによる影響については、携帯電話では概して画面が小さく、利用するとき文が短文で細切れになりがちである。利用者は前後の内容の論理的関係などあまり考えずに、文章を送信してしまう。使う言葉は専ら話し言葉であり、細切れの単語の送受信で通じあってしまうような状況である。高校の現場でも論理の飛躍した作文が見られることが教員によって指摘されている。(4)

日本の社会や大学をとりまく以上のような状況にあつて、大学に進学してきた学生を相手に、例えば哲学という授業で何を伝え、どのような授業の運営ができるかを以下に考えてみたい。

2. 学生にとっての哲学

日本の大学生にとっては高校時代までに「哲学」と名のつく科目を履修してきた経験はない。高校で学ぶ科目として最も哲学に近いのは「倫理」であろう。倫理という語であれば、特に人間の規範意識や「かくあるべし」という当為に照らして行動の方向性を探求する学問であるという予想がつく。しかし哲学は、その名称だけではにわかに学問の特徴がつかみにくいところが高校生にも、また一般的にもある。

ところで、哲学の国と言え、哲学者デカルトを生んだフランスである。フランスの大学入学資格試験（バカロレア）では哲学は必須科目であり、この科目の成績が悪いと入試結果に大きな影響を及ぼす重要科目である。試験でどのような哲学の問題が出題され、高校生たちはどのような入試問題を解いているのかを以下に例として挙げてみよう。(5)

「科学的な仮説を証明することはできるのか？」

「人間は自分の幻想を抱いてしまう定めなのか？」

「国家がなければ我々はもっと自由だろうか？」

「労働とは単に有用であるということだろうか？」

「信仰はすべて、理性に反するものだろうか？」

受験生は4時間かけてこのような問題の答案を書き上げるという。決まった1つの解答を反射的に導き出す訓練を専ら受けてきた日本の受験生が解く問題とは、相当に趣が異なる。

以上のような哲学の問題を解く訓練を受けずに大学に入学してくる日本の学生にとって、授業との最初の接点は大学が用意したシラバスを読むことである。筆者が勤める大学のシラバスでは、以下のように筆者担当の授業（「哲学の基礎」）の概要と到達目標を記載している。

＜授業の概要＞

哲学というと、あなたはどのような学問だと思いますか。抽象的で難解な言葉を弄する学問で、自分とは関係がないと思っているのでしょうか。実際には哲学は、あなたが日々の生活を生きていく中でぶつかり、疑問に思うようなことを、じっくりと腰をおちつけて考える学問なのです。この授業では、日常の身の回りの事物や出来事を頻繁に例として取り上げ、「～とは何か」、「なぜ～なのか」という疑問をもちながら哲学的に考えることの面白さにふれたいと思います。

＜到達目標＞

何をするにもスピードが求められる現代にあつて、物事の本質について粘り強く考える訓練を大学生の時期にすることは決して無駄なことではないでしょう。授業を通じて、とくに人間とは何かについて少しでも深く考えられるようになることが目標です。

授業概要も到達目標も、哲学という学問を紹介する意味合いの強い内容である。そして平成 24 年度に開講された授業 15 回の具体的な内容を紹介します。シラバスが以下である。（ただし、学期途中で前後の順番を変えたり、中間試験を実施するといった変更はある。）

- ・人間とは何か（1）。階層構造説。カントの人間論・人格論。パーソン論。
- ・人間とは何か（2）安楽死を考える。
- ・人間とは何か（3）～射水市民病院の問題を考える～
- ・人間とは何か（4）～自然や動物との関係を考える～
- ・人間はどこまで自由か？「自由と必然」。スピノザの哲学。
- ・いかに決断し生きるかを考える。古代ギリシア、ヒュームの懐疑論。決断と自己限定の重要性。ヘーゲル、サルトルの哲学。
- ・他者や社会との関係を考える。社会契約論。「人は皆一人では生きてゆけないものか？」
- ・感情と知性との関係を考える。感情とどう付き合うか。デカルトの『情念論』。
- ・笑いとは人間。笑いについて考えた哲学者たち。
- ・視覚と触覚を考える。バークリーの哲学。
- ・心とは何か。宮沢賢治の自我論。
- ・人間と機械の関係を考える。
- ・幸せな生き方とは。哲学者の幸福論。

以上がシラバスによる授業内容の説明であるが、これだけでは哲学がどのような学問であるのか、学生にはまだ明確なイメージがわからないだろう。そのために履修登録期間中でもある初回の授業では、哲学がどのような学問かを説明することから始めることになる。

3. 哲学の特徴

哲学は何を研究している学問なのかが、学生にも世間一般的にもまずわかりにくい。哲学という名称だから「哲」が研究対象なのかという素朴な疑問も起こるところである。他の学問名であれば、例えば物理学、生物学、政治学、経済学というように、それぞれが何を研究する学問であるかという対象名が示されている。しかし、哲学は名称だけではすぐに学問の性質がわからないという特徴がある。

そもそも「哲学」という語は、明治時代の初めに西周（1829～97）によって作られた。「哲学」は英語で philosophy であり、この語源はギリシア語の philosophia（愛知）という語で、sophia「知恵」を philein「愛する」という意味である。西周は、賢哲（賢明、道理をわきまえている）を愛し希求するという意味で「希哲学」と訳したが、肝心の「希」（philo）の語が脱落して定着してしまったために「哲学」という語になり、このことが哲学という学問を分かりにくくする一因となった。

それにしても、哲学とは「知恵を愛し求める」という定義だけではあまりにも漠然としている。「知を愛する」とは具体的にどのようなことなのかを説明するために、筆者は授業で哲学の特徴を「よく生きる」、「常識を疑い物事の根幹・原理を考える」、「言葉を的確に使う」、「哲学する姿勢をもつ」という点から解説している。

「よく生きる」ということ

様々に定義されうる哲学だが、最終的に哲学では、人生をいかに生きるべきかという問題に行き着く。つまり、われわれがいかに生き、また行動すべきかという基本原理を考察するのが哲学の特徴である。人間は、他の動物のように食って寝て生きているだけでは満足できない。ソクラテスが指摘したように、人間は単に生きることでなく、よく生きることをこそ何よりも大切にしなければならない。

例えば、科学技術の発達した現代の日本の状況の中で、どのような生き方が「よく生きる」と言えるのかを考える。科学技術は、自然環境を人間が生きていく上で、少なくとも直接的には好都合であるように変えてきた。暑ければクーラー、暗ければ電気蛍光灯、遠ければ電車・自動車、連絡が取りたければ電話・携帯・パソコン、夜中に空腹になったらコンビニ、というようにである。我々の生きる環境は、「便利に、速く、効率よく、快適に」をモットーとして人工的に改変されてきた。

しかし「便利、速さ、効率的、快適」を自明の価値として疑わなければ、不便、遅い、非効率、不快は無条件によくないということになりかねず、これらを憎む態度を助長しかねない。例えば遅いことを毛嫌いする態度が強くなっていけば、イライラすることが多くなり、待てない社会になっていくだろう。高齢社会では老人が増えるわけだが、老いるということは、仕事の効率が悪くなること、遅くなることであり、場合によっては体臭等で臭かたりすることでもある。老いを避けられない人間の宿命を考えた場合、速さ・効率・快適だけを自明の価値とする考え方では行き詰まるであろう。

携帯電話が発明され、その機能が複雑化していくことも、便利だからといってあながち喜んでばかりはいられない。どっぷり携帯電話に依存しなければ生きていけない「携帯依存症」や「即レス症候群」に陥る者も出てくる。私たちはこの文明社会の中でたくましく生きているのか、氾濫する情報や日々進化する機器に振り回されていないかという問いかけは、自分の生き方を省みるうえで意味のあることだろう。

文明社会の進展は必ずしも人間の進歩を保証するものではないと言っても、医療分野での進歩は疑いようのない事実であり、病気の治療において、科学技術の有力な一つとして医療技術の発展が見られるのではないか。長らく人類を苦しめてきたペスト、天然痘、肺結核などの感染症は押さえ込むことができるようになった。医療技術が発展することによって、先進国では人間の平均寿命がいちじるしく伸びたのであり、これこそまさに人間の発展・進歩と位置づけられるのではないか。

しかしながら延命のための医療技術が発達した結果、どのようなことが起こってきたか。昔ならば自分の家で家族や親しい友人に看取られて、静かに死を迎えていたのに、今では少しでも死の時刻を先に延ばすために、病院の集中治療室で人工呼吸器を当てがわれ、点滴などのチューブ、心電図モニターなど、コードだらけの姿でベッドにくくりつけられるといった状況が見られるようになった。医者は患者よりもコードの先にある機械の方だけを見るところも起きる。これがはたして人間にとって幸せな生き方か、あるいは死に方なのだろうか、という素朴な疑問が出てくるのも当然である。

末期のガン患者などで、不治の病で余命いくばくもなく、しかも堪え難い肉体的苦痛がある場合に、患者の求めに応じて、医者が死に至らしめるという安楽死が合法化されている国がある。何が何でもただ生かしておくこと、生命を長引かせることが人間にとって無条件に望ましいことなのか。時間的に1分1秒でも長生きするという量だけの観点でよいのか。それよりもどのように生きるのかという質を考え、「よく生きること」、「人間として価値ある生き方」を考えるべきではないのかという視点から、「生命の質」(Quality of Life、QOL)が提唱されるようになった。すなわち医学の進歩によって、「(ただ) 生きること」と「よく生きること」との乖離が起きているのである。

人間として「よく生きる」とはどのような生き方なのかという問いは、シンプルではあるが、現代の我々にとって大切な問いかけである。便利で快適、物質的に豊かな状況の中で、与えられることが当たり前となり、与えられることに慣れきってしまうと、今度は与えられないことに不満が生じがちになる。人間はただ受け身に餌を与えられている動物に墮してはならないはずである。

また単純に速さだけを目指すことも疑問視されるようになってきた。ファーストフードに代わって、

その土地の風土にあった食べ物をゆっくり楽しむスローフードが提唱されているのはその一例である。

文明社会の中でよく生きることを考える意味について触れたが、特にむずかしいことを言わなくとも、実は学生はすでに「よく生きる」ことを考え、よく生きたいと思っているはずなのである。「なんだけ毎日かったるい。だらだら生きている感じがする。自分の人生これでいいのだろうか？」などと考えている時にすでに、自分の生き方を問い、人間として「よく生きる」ことを模索している。

このように哲学とは、人間の生き方と社会、自然、さらには世界のあり方とを統括すべき全体的な知を希求する営みなのである。

常識を疑い、物事の根幹・原理を考察する

哲学には、常識を疑い、普通の学問がわかりきったこととしてそれ以上考えようとしないうことを、あえて考えようとする面がある。そのために、「なぜ～なのか?」「～とは何か?」という問いかけが哲学では重要になる。諸科学はすでに存在しているものを前提にし、その存在者について研究する。生物学なら生物、植物学ならば植物という存在について研究する。それに対し、哲学では存在そのものの意味を問う。「存在」と言えば、一般的には目で見え手で触れることと理解されているかもしれない。しかし、例えば、「俺は毎日が空虚だ。存在している感じがしない。」などと言う時には、別の意味が入り込んでいる。

このように哲学では、使い慣れていて普段は問題にしないような基本語、例えば「人間」、「知っている」、「心」、「真である」などの意味を改めて問い直す。「人間とは何か?」という問いかけは、例えば安楽死や尊厳死などが問題になる場面で鋭く突き付けられる。「心」についても同様で、「心」という言葉をわれわれは簡単に口にするが、いざ「心とは何か?」を考えはじめると、大変むずかしい。そもそも心というものを目で見たり、手で触ったりすることができない。おにぎりの中に収まっているうめぼしのように、人間の脳を解剖してみたら心というものが見つかった、というものでもない。

以上のような意味で、哲学という学問は今まで知っていたつもりのことを本当には知らなかったことに気づき、真実の知をめざそうとする姿勢、ソクラテスの言う「無知の知」を重視する。

言葉を的確に使う

哲学には、日常の様々な話し方や言葉遣いを、誤解の生じないように言語の論理的分析によって整理するという側面もある。だれもが使う日常語だからといって、意味がきちんと限定されているとは限らない。哲学は言葉を曖昧に使わずに、意味をはっきり限定して用いる。

言葉を漠然と曖昧に使っていると、ムードにのせられて正しく物事を考えられなくなり、人生をつまらなくする恐れがある。自分の狭い体験の印象をしっかりと吟味することもなく一般化し、「人生はなんだか、おもしろくない」、「人間は皆イヤなやつばかりだ」、「おれはいつも失敗している」などと安易に言葉を使っていないか、立ち止まって考えてみる必要があるのである。(6) 社会、自然、世界、そしてそこに生きる自分を、ムードや気分本位で見るのではなく、できるだけ冷静に、適切な言葉で捉え表現しようとする姿勢が大切だということである。

ところで専門用語という点から言えば、哲学用語と言われるものもたしかにある。例えば「形相」(けいそう)、「実体」、「主観」、「止揚」、「実存」などといった語である。しかしながら、哲学の専門用語は、法学・政治学・経済学・生物学・物理学・化学などの分野の膨大な専門学術用語に比べれば、案外と少ないと言える。

哲学する姿勢

以上のように哲学はさまざまに定義されうる。「よく生きることを求める」、「常識を疑い、物事の本質を考える」、「言葉を論理的に使う」、「自分を社会や自然、世界との関係の中で全体的にとらえる」など。つまり哲学とはこうであるという1つの定まった定義がない。

そして何かを覚えたり暗記して知識を得ることがそのまま哲学であるわけではない。たしかに過去の哲学者たちの思想を授業で紹介することはあるにしても、その哲学者たちの考えをそのまま暗記することが哲学であるわけではない。過去の哲学者たちの問題意識を受け継ぎ、彼らが考えた問題を自分の立場で問い直すという作業がどうしても必要になってくる。

つまり、哲学とは、何かを丸暗記するというのではなく、自分の頭で深く考える姿勢が最も大切とさ

れる学問である。「人は哲学を学ぶことは決してできない。せいぜい哲学することを学びうるだけである。」(カント)というのは、出来合いの対象を覚えることが哲学ではなく、つねに自分で問い直し、哲学的にものを考える、あるいは哲学するという動詞的営みとして哲学があるということである。

哲学的な諸問題はさまざまな姿で表れてくるが、哲学において発せられる問とは、人間に宿命のように背負わされていて、しかもどこかで解決されてしまうことがありえないような「永遠の問い」である。つまり、どうしても考えずにはいられないのに、答えが1つに収まることがないような問いである。例えば「どんな場合にも人の命を絶つことは許されないのか?」という問いかけは、安楽死や死刑制度等との関係で、容易には答えが出ない問題である。まさにカントの言うように、「人間の理性は奇妙な運命を持っている。理性そのものの本性によって背負わされながらも、理性の能力を超えているから答えられない問いによって悩まされるという運命である。」(7)

高校時まで受験勉強を中心に専ら知識の暗記に従事してきた学生にとって、解答が1つと決まっているわけではない問題を考えるということは、不慣れではあるが、決して無味乾燥なことではない。人生で逢着する問題の中には、すでに決まっている解答を反射的に再現するといった受験勉強のやり方では解決できない問題が多々ある。人生には簡単に解決できず割り切れない問題があると気づくだけでも、そこには学問に携わる新鮮な驚きがあるだろう。

大学という場は、色々な知的驚きを体験できる貴重な場である。デカルトが言うように、驚きがなければ人間は成長せず、驚きをもつことの少ない人間、いわば何ごとにもシラケた状態にいる人間は無知であり、人格的にも向上しない。(8)

筆者は初回の授業で以上のように哲学の特徴を語り、授業の大きな目標を、「考える姿勢をつけること」、「よく生きることについて考えること」、「自分を社会や世界との関連の中でとらえること」と位置づけている。

さて、実際の授業で深く考える習慣をどのように学生に少しでもつけてもらえるかという点から、平成24年度の授業では、「なぜ?」を5回繰り返す」という作業を学生にしてもらった。以下、その点を説明したい。

4. 授業の実践例と学生の答案

哲学で最も大切な姿勢は自分の頭で考えることであり、論理的思考力を伸ばすことは哲学の授業目的としてふさわしいだろう。論理的に考える方法の端的な例が、ある事柄の理由を考えることであると筆者は考え、「Why (なぜ?)」を5回繰り返す」ことを学生に実践してもらうことにした。Aということに対してWhy (なぜ?)を問いかけ、その理由としてB (だから)を導く。次にはなぜBかを問いかけ、その理由はC (だから)。以下、同様にして合計5回「なぜ」を繰り返す。評価においては、BだからAだという因果関係が説得的であるかどうかのポイントとなる。

因果関係は、まさに日常の様々な場面で問題となる論理的関係である。ある結果を招いた原因は何なのかという原因究明は、日常生活で事故や事件が生じたときに必ずや問題になるという意味で、因果関係は我々にはなじみが深いとともに、ひじょうに重要な論理的関係である。何らかの問題に対する解決策を考える場合でも、正当な根拠に基づいて理由づけができるかどうかは鍵をなすと言える。

今回は、「哲学の基礎」という全15回の講義形式の教養科目において、第8回までの授業を行った後に、第9回目の授業1回を使って中間試験を実施した。なお、それまでに配布したプリントやノートも持ち込み可能とした。受講者は1年生から4年生までの計108名。(内訳は1年生が73名、2年生30名、3年生3名、4年生2名。)

試験の設問内容は以下のとおりである。

「あるテーマを設定して、そのテーマから「なぜ?」を5回繰り返して、合計6つの文を完成しなさい。テーマの内容はこれまで8回の講義で扱われた内容に関係するものであれば、どのように最初のテーマを設定してもかまわない。」評価のポイントとしては、「A」なぜ?→「B」において、BがAの理由としてふさわしいかどうかである。

今回の設問は、因果関係というものが学理的にどのような概念であるかを厳密に問うという性格のものではない。実は因果関係を哲学的に議論し始めると大変に難しい問題を孕んでおり、廣松渉の以下の指摘は、因果関係を理解する難しさを示している。

「例えば、砲弾の命中が原因で城壁の崩壊という結果が生じたという言い方をする。が、原因は、砲撃主の行動だとも言われうるし、指揮官の発射意志・命令だと言うことさえもできる。また、城壁も一方的に結果の側に属するのではなく、その堅牢性があるのはじめて砲弾の炸裂がありうるのであって、それがもし紙のようなもので出来ていれば貫通はしても崩落はしないことであろう。因果関係と思われているものは物理的にはじつは相互作用なのである。翻って、城壁の崩落の原因はむしろ重力の作用と言わねばならず、砲弾の命中は機縁にすぎないとも考えられるのである。」(9)

このように因果関係そのものを本格的に議論し始めると厄介なことになるのだが、以下の指摘は、因果関係を考えるうえで最低限押さえておきたい点である。

「(因果関係では——引用者)先行事象と後続事象との継起に必然性のあることが必要条件です。だが、必然的継起というだけでは因果関係とは言いません。例えば、昼に夜が必然的に継起するからといって、昼が原因で夜という結果が生じるなどとは誰も言いません。(中略)(必然的継起ということに加えて——引用者注)前件が後件を必然的に『惹き起こす』場合に因果関係が云々されるわけで、原因には結果を『惹き起こす』能動者・起動者であるということが含意されている」(10)

今回の試験では学生たちに因果関係にそって解答してもらったわけだが、この場合の因果関係とは、あることを主張する際に、その根拠・理由を示すというレベルの、いわば常識的な意味での関係である。しかし、たとえそのようなレベルであっても、物事より本質的な原因や理由を考えるという作業は、学生にとっては困難だったようである。90分という試験時間の制約に加えて、彼らにとっては、なぜ？を繰り返すという設問形式に明らかに不慣れであったことがわかる。なぜ？を繰り返すというのは一見シンプルな問いであるが、情報のあふれる現代社会にあって、学生はじっくりと1つのことに向き合っている時間をもたず、1つのテーマを設定して、そこから問いを繰り返して思考を深めていくという作業をほとんどしていないのかもしれない。

今回の学生の答案にあって、学生本人は根拠を示す理由づけとと思っている文の内容が、実は理由づけになっていないというケースが多かった。以下に、その具体的な例を挙げてみたい。なお解答において、「A→B」の意味は「A。なぜならばB。」であり、()内は筆者の解釈である。

まずひじょうに多く見られた解答が、同一内容の繰り返しや言い換えにとどまるケースだった。

「社会に出るために大学で勉強する」→「就職するため」。

「他人とは考え方がちがう」→「別の人間だから」。

「笑う角には福来る」→「笑って過ごしていれば幸福なことがある」。

「末期ガンで治療ができない」→「どんな医師も治すことができない」。

「哲学とは自分がゆずれないものをもつこと」→「簡単に譲ってしまうものは哲学ではない」。

「ユーモアはその人の人格に関わっている」→「ユーモアは、生活態度や人生観などの人間の生き方そのものを表している」。

「人は音楽によって励まされ音楽とともに生きてきた」→「音楽のない生活はこの世にない」。

「これからの人生では何が起こるかかわからない」→「人生は偶然であり何が起こるかかわからないから」。

「安楽死という死に方法がある」→「最も楽に死ぬことができる方法である」→「病気で苦しい思いをするのは嫌だから」→「苦しい思いをしながら長くは生きたくないから」→「死ぬときぐらいは楽になりたいから」。(苦しいのは嫌であるという同一内容を色々と言い換えている。)

「私は安楽死に対して否定的である」→「人の命を絶つことは許されない」→「殺人と考えられる」→「尊い命を殺すのはよくない」。(人の命を絶つことはよくないという内容の繰り返し。)

「私は優柔不断である」→「決断するのに時間がかかる」→「なかなか決断できない」。

「人は死ぬ」→「人は生を授かると必ず死を迎える」→「人には寿命がある」。

「人はお互いに違っており、他者は自分にはないものを持っている」→「自分という存在は1つしかない」。

「病気が治る見込みがない」→「治療法がない」。

「子孫を引き継いでいくため」→「人類を生存させるため」。

「人は自由を望む」→「誰からも捕われたくない」→「自分の意思で動ける」→「行動で他者から邪魔されない」。

「物事について断定することはできない」→「積極的な主張を止める」。

「優柔不断は生き方としてみっともない」→「物事はスパッと決めるのが格好いい」。

「人は笑う」→「予期しないことが起こる」→「予想とのズレが生じる」→「すれ違いのギャップがおもしろい」

「人間は様々な感情をもつ生き物である」→「辛いこと、悲しいこともあり、またうれしいことや楽しいこともある」。

自分が現在空腹であることの原因を考えて、「朝食を取らなかった」→「朝早く起きられなかった」→「昨日就寝が遅かった」→「DVDを深夜まで見ていた」(深夜までDVDを見ていたことと就寝が遅かったことは同一の内容)

「私はなぜを5回繰り返す」→「哲学の中間試験の問題だから」→「哲学の単位を取得するため」→「進級および卒業するため」。(進級および卒業するために単位を取得するというのは、因果関係としてはやや弱い。単位を取得すれば自ずと進級や卒業はできると考えれば、単位取得と卒業とは同一内容の言い換えともとれる。)

時間的な前後関係にしたがって事柄を並べただけというケースもあった。先の例で言えば昼の後に夜が続くという場合であり、極端に言えば「今年前10時である。」→「10分前は午前9時50分である。」というような内容である。

「私は雪が降るのが怖い」→「自動車の事故が多発する」→「寒いから」→「冬だから」→「秋が終わったから」(秋の次に冬が来るとするのは因果関係というより、時間の前後関係)

授業で紹介された**哲学者の意見をそのままなぞるだけのケース**。

「人間は自己意識のある理性的存在者である」→「カントがそう捉えた」。(カントがそのような立場をとる哲学者であるということを授業で聞いたために、こうした解答が出てきたようである。少し考えればわかる通り、カントがそう捉えたから、それによって、人間が理性的な存在者になったわけではないので、理由づけの文としては不適格である。知識として暗記したことがそのまま解答になるという思いが学生にはあるようだ。)

後続の文が先行する文の結果になっているというように、**前後の原因・理由の関係が逆転しているケース**。

「高校のときにスポーツで成績を残せずに悔しかった」→「大学の大会で成績を残したい」。

「予期していないことで笑うと頭がリフレッシュされリセットされる」→「リセットされると次のことに緊張せずに集中できる」。

またなぜ?を5回繰り返して導かれた**後続の文が、いくつか先で述べられた文の内容に戻ってしまうケース**。いわば堂々巡りをしている場合である。

「幸福になりたい」→「今の状況に不満がある」→・・・→「心が満たされていないと感じる」。

なぜ?を5回繰り返して導かれた**後続の文が、いくつか先で述べられた文の内容と矛盾してしまうケース**もあった。

「安楽死をなぜ行うのか」→・・・→「本人が強く生きたいと思っているかもしれない」。(本人が強く生きたいと思っているかもしれないならば、その人の命を絶つことはできないと考えるのが順当であって、「安楽死を行う」ことの原因としてこの文が後続するのはおかしい。)

後続の文章を直前の文章の理由とするには**論理の飛躍**が見られるケース。

自分が今幸福であるというテーマに関連して、「好きなことができ友だちと遊べる」→「生きているからできることで、死んでしまったら何もできない」。

同じく自分が今幸福であることに関して、「美味しいものが食べられる」→「体があるから」。

人が泣くという行為に関して、「心のためこんでいたものが声と涙になって表出される」→「それが人間の仕組みである」。

これらの場合、「生きているからできる」、「体があるから」、「それが人間の仕組み」という表現は、何の理由にもなりうるような内容であって、因果関係を深く考えていることにはならない。

また、A→B→C→・・・で、AやBが複数の文章からなっていて**複数の内容**を含んでいるために、

Aの中の中のどの文と、Bの中の中のどの文が因果関係になっているのかがわかりにくいケースがあった。すなわち、A (A 1。A 2。A 3。) → B (B 1。B 2。) → C (C 1。C 2。C 3。) → … のように解答が書かれているために、後続する文章のどの内容が、先行する文章のどの理由になっているかが判然としないというケースである。

他にもBがAの理由や根拠になっていないケースとして、以下のような解答があった。

人間が自然界の頂点に位置するということに関連して、「人間には動物・植物・物質の特徴がすべて備わっている」 → 「人間が存在するために動物・植物・物質に依存してきた」。(何かに依存することが、その何かの特徴を備える理由とはならない。)

「人は笑う」 → 「他者に対して自分の優越性を感じる」 → 「常識や予想からズレを起こす」 → 「緊張していた予期が全くの無へ突然に転化する」(ズレを起こすことが自分の優位性を感じることの理由とはならない。)

安楽死に関連して、「治療を施してもどうにもならない場合がある」 → 「人はいずれ死ぬ時が来る」(いずれ死ぬことが、治療の可能性を否定することにはならない。)

興味深い解答としては、「私はこのテストでこれ以上解答が思いつかない」 → 「前日にテスト勉強が最もできなかった」 → 「疲れてやる気が起こらなかった」 → 「久しぶりのバイトをした」。(最初の文の理由を掘り下げて考えた解答が、バイトをしたというのでは何やら物足りない。)

5. 今後の課題

Why (なぜ?) を5回繰り返すという設問形式そのものはたしかにシンプルである。しかし学生にとっては因果関係にそって「なぜ?」を5回繰り返すのは難しかったようで、物事の本質的な原因を日頃深く考える習慣をもっていなければ、今回のような設問は困難だったろう。まして90分という制限のある試験時間内では当然あせりも出るだろうし、日頃不慣れな作業が授業中に急にできるようになるとも思えない。学期の途中で、折にふれて「なぜ?」を5回繰り返す中間試験を行うことを予告したり、「なぜ?」を繰り返す例を何回か授業中に示したが、これだけでは明らかに不十分であった。

今回の試験では特に**正解と呼ばれるものがない**。テーマの設定も自由であるし、同一のテーマを設定したからといって、その後が続く理由を示す一連の文章群が学生間で同一になるわけでもない。しかし、なぜを5回繰り返すには、最初のテーマ設定の段階で失敗すると、その後が続きにくくなってしまいうので、できるだけ理由を深く掘り下げていけるようなテーマをまずこちらから学生に提示してあげるといふことも必要かもしれない。

今後の課題としては、「因果関係」なるものがどのような関係であるのか、また因果関係も含めて2つの文の論理的関係にはどのような種類があるのかを学生に解説することが必要であろう。例えば、代表的な関係として「付加、理由、例示、転換、解説、帰結、補足」の7つがあることを示すというようにである。(11)

「付加」は、「A。そしてB。」というように、新たに主張が付加される関係で、代表的な接続表現は「そして」。

「理由」は、「A。なぜならばB。」というように、前文の主張に「どうして?」という問いをもち、それに答えるかたちで後続の文が続く場合。代表的な接続表現は「なぜなら」。

「例示」は、「A。たとえばB。」前文の例を後の文が示す場合で、代表的な接続表現は「たとえば」。

「転換」は、「A。しかしB。」前文の主張から主張内容の方向が変化し、しかも後続の文の方に主張の力点があるような場合で、代表的な接続表現は「しかし」である。

「解説」は「A。すなわち(つまり) B。」前文とほぼ同じ内容を言い換えて解説する場合で、代表的な接続表現は「すなわち」や「つまり」である。

「帰結」は「A。だからB。」前文の内容から後続の文が結論される関係で、先の「理由」における2文の前後関係が逆になったものである。つまり、「B。なぜなら、Aであるから」が言えるということとは、「A。だから、B」が言えるということである。代表的な接続表現は「だから」である。

「補足」は、「A。ただしB。」前文の内容から主張の方向が変化し後続の文へと続くが、変化後の主張はあくまでも副次的であり、先行の内容を補う関係にある。代表的な接続表現は「ただし」であ

る。

今回の設問は「理由」を連続的に問うという形式であったが、上記の分類に従えば、学生の解答には「解説」になっているものが多く、「帰結」も見られた。

また、後続文が先行文の根拠として正当な理由づけになっているかどうかを考える際に、先行文の内容が後続文の内容によって引き起こされる確率が「必然的」とまで言えないにせよ、相当に高いことも必要である。例えば、「風が吹けば桶屋が儲かる」という。このことわざの理由づけは、「桶屋が儲かる」→「桶が品薄になる」→「桶をかじるネズミが増える」→「猫が減る」→「猫の皮を材料にした三味線が多く作られる」→「三味線をひいて業とする盲目の人が増える」→「砂埃で盲目の人が増える」→「風が吹いて砂埃がたつ」。ストーリーとしては誠に面白いのだが、砂埃がたつことによって人が盲目になる確率や、盲目になった人が三味線ひきになる確率などを考えると、後続の文が適切な理由づけになっているとは言いがたい。

実際のところ、今回の試験は試行的に実施したというレベルである。学生諸君が授業を通じて自分の思考をさらに深められるように、今後も実施方法の工夫を図りたいと考えている。

注

- (1) 『大学生生活のためのツールブック 2012』 富山国際大学現代社会学部。
- (2) 「学士過程教育の構築に向けて」平成 20 年 3 月 25 日 中央教育審議会大学分科会 制度・教育委員会。
- (3) 『社会人基礎力育成の手引き～日本の将来を託す若者を育てるために』 経済産業省。
- (4) NHKクローズアップ現代「言語力が危ない」2009 年 11 月 25 日放送。
- (5) フランスのバカロレア試験の過去に出題された問題については、以下のホームページを参照した。
「首都大学東京 フランス語圏文化論」 <http://tmufr.blog130.fc2.com/blog-entry-92.html>、
2013 年 1 月 21 日取得。
「フランスのニュース最新版」 <http://franceactu.seesaa.net/article/297926522.html>、
2013 年 1 月 21 日取得。
- (6) 本田有明『哲学の練習問題』洋泉社。
- (7) カント『純粹理性批判』。
- (8) デカルト『情念論』。
- (9) 廣松渉『新哲学入門』岩波新書。
- (10) 同上。ただし廣松の真意は、能動者・起動者として理解されている因果関係そのものの検討にまで及んでいることを付記しておく。
- (11) 野矢茂樹『論理トレーニング 101 題』産業図書。

参考文献

- ・ 山本信『哲学の基礎』北樹出版。
- ・ 藤沢令夫『哲学の課題』岩波出版。
- ・ 藤沢令夫『よく生きることの哲学』岩波出版。
- ・ 山崎正一、市川浩『現代哲学事典』講談社現代新書。